

平成28年度
北海道教育大学
附属函館幼稚園だより
NO. 13 【号】
平成29年2月1日(水)



福は～うち！福は～うち！鬼も～うち！

園長 橋本忠和

2月3日は節分で、幼稚園では「豆まき」をします。園内には、とっても可愛い大きな赤鬼と青鬼が、手作りのたくさんの元気な鬼のお面と共にその日を待っています。きっと思い出多い、お楽しみ集会になるでしょう。

私も小さい頃、父親と共に自宅のすべての部屋に「鬼は～そと、福は～うち！」と豆をまき、子どもができてからは、鬼になって豆を投げられた思い出があります。

近年は「追い払われた鬼、行くところなくて、寒い夜にかわいそう」と、「福は～うち！鬼も～うち！」と言って豆をまくところもあるとか。鬼とは自分にとっての厄（四苦「生・老・病・死」）を指していると言われてはいますが、人として生きているかぎり四苦は逃れられないものですので、できれば上手に、お手柔らかにおつきあいたいもので、ここ数年、「自分にとっての鬼は何だろう？」と考えながら、鬼の部分は小声ですが「福は～うち！福は～うち！鬼も～うち！」と言っております。ですが、園児や保護者の皆様には、「豆まき」



鬼もスタンバイ忠(中)

でたくさんの福がお家に、自分の中に来ることを願っております。さて、子どもの冬休みの様子を描いた絵を見ていて思うことがあります。それはたぶん「豆まき」等、季節の行事に対する園児の視点とも共通することだと思っておりますが、「馴質異化」という想いです。これは「じゅんしつか」と呼ぶのですが、意味は「見馴れたものを見馴れないように見る」で、物の見方や考え方をさす言葉です。

子どもの絵には私たちが普段見馴れて、その良さや面白さを見過ごしてしまっている「こと・もの」を価値や魅力を感じさせてくれます。また、その魅力を見逃さない、「知りたい・分りたい」とう素直な視線の大切を教えてください。この「馴質異化」の反対語は「異質馴化」（いしつじゅんか）といって、いまだ見たこともないし、したこともないものを、知っているのと表面的に馴らしてしまうことです。幼稚園では、子どもたちの「馴質異化」の目線を園での生活体験の中で学びへと繋がるよう大切に育んでいきたいと考えています。そのためにも私も含めて保育者が、自らの保育を「馴質異化」の目線で振り返り、向上させていきたいと思っております。

最後に、鬼は鬼でも、インフルエンザ等のウイルスは、外へ追い払いたいもの。流行しているという報道を多く聞きますので、ご家庭でも、うがい手洗い等の留意をしていただき、ウイルスを家から追い出して下さい。